

国立能楽堂復興と文化V「鎮魂と再生の身心変容技法としての神楽と能というワザヲギ」2017年3月23日 鎌田東二

命題1：能＝申楽は「半神楽」である。（「神楽」の「神」の「示」偏を除いた「申」の楽という意味で）

命題2：神楽はアメノウズメノミコトの天の岩戸の前での「神懸り＝顕神明之憑談＝俳優（ワザヲギ）＝鎮魂」より始まる。

命題3：世阿弥の舞はアメノウズメより始まる神・死者の魂呼ばいのワザの流れの中にある。

命題4：世阿弥の謡はササノヲより始まる悲嘆と祝言の表出である。

命題5：能＝申楽は「平時（平和時）の修験道」である。

命題6：世阿弥は修験者＝身心変容技法者である。

命題7：「諸国一見の僧＝身心変容技法者」は「平家物語」を謡う琵琶法師や修験者＝山伏を原型にしている。

命題8：世阿弥作「高砂」は「阿蘇の神主」（阿蘇友成）でなければ海山を統合して祝福できなかった。

命題9：能（申楽）、複式夢幻能はこの世とあの世を経巡り、謡い舞い、心と魂と鎮めるタマシズメのワザである。

命題10：世阿弥の「^{ものまね}物学」稽古論（特に「離見の見」と「目前心後」）は「トランス技術」のシステムとメソッドである。

命題11：世阿弥最晩年の『金島書』は悲嘆と諦念の澄明が隅々まで浸透した畢竟の最高傑作である。

神事祝言としての能：『翁』『千歳』『三番叟』（式三番）『高砂』など

平家物語に基づく能『敦盛』『八島』『船弁慶』（観世信光）『清経』『忠度』『頼政』『実盛』『朝長』『経盛』『重衡』

1、歌の始まり～スサノヲの出雲流浪とヤマタノヲロチ退治と詠歌による「我が心、すがすがし」

・怪物（八岐大蛇）退治と剣と結婚：同じきもの（追放されしもの）が同じきもの（怖れられしもの）を倒す力＝剣による制御（外的世界の鎮め・社会の制御）と言葉による制御（内的世界の鎮め・心の制御）＝歌の発生
「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに 八重垣作るその八重垣を」＝「我が心、すがすがし」：言葉による浄めと鎮め

2、神楽の始まり＝サルタヒコとアメノウズメノミコト（「神楽・鎮魂・神懸り・俳優」）→「猿女」

・アメノウズメノミコトは手に笹葉を持ち、「神懸り」になって、胸乳と女陰を露わにし、神々の笑いを引き出し、最高至貴の女神とされる、日の神であり皇祖神である天照大神を岩屋から呼び戻す。（『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』）

・太陽陽神の復活を実現＝「神懸り・顕神明之憑談・俳優」・「顕神明之憑談」＝「かみがかり」

・「俳優」＝「わざをぎ」・神を呼び出し招きよせる（をぐ）ワザ（業・技・術・伎）＝神懸り＝ワザヲギ＝「神楽」の起源

・「猿女の祖もまた神怒を解めまつりき」（『古語拾遺』）・中臣・斎部に次ぐ祭祀職としての猿女氏・猿女氏＝サルタヒコとアメノウズメの子孫・猿女氏＝「神楽の事」により「神怒」を鎮める役割。

・猿女氏の祖：アメノウズメは、「神懸り・俳優（ワザヲギ）」の祖にして「鎮魂・神楽」の祖。

・アメノウズメの「ワザヲギ（俳優）」が「神懸り」であり「神楽」でもあり「鎮魂」でもあり、「神の怒り」を鎮める行為。

・「神楽」という芸能的要素を交え、神々の御霊を慰め、怒りや祟りを鎮める所作、それが祭祀の原型。

・世阿弥は、「神楽」を観阿弥から引き継いだ大和猿楽座の芸能の祖型とした。

・「申楽」（猿楽・能）は神々や諸霊の怒りや悲しみを鎮め解く「神楽」的な霊的パフォーマンス

3、スパイラル史観と悲嘆と「天下の御祈祷」としての能＝申楽の発生～平家物語・能・茶・華～鎮魂の技芸

「死生学とスピリチュアルケア」を考えるにあたって、死生観や生死の意味や意義を問うことが問題となる時代について振り返ってみる。死生学やスピリチュアルケアの問題を歴史的事例から掴み直すという視点である。

私は元号が「平成」になった1989年から自覚的に「現代大中世論」を主張するようになり、ここ数年はそのような見方を「スパイラル史観」として提示している。その「スパイラル史観」とは、古代と近代、中世と現代に共通の問題系が噴出しているとして、近代と現代を古代と中世の問題系の螺旋形拡大再生産の時代と見て取る史観である。古代と近代の共通項を挙げるとすれば、まず何よりも巨大国家の確立、すなわち帝国の時代の到来であったといえる。古代帝国と近代国民国家の確立の中で覇権を争い、中央集権的な国家体制の確立を見、植民地支配を含む「帝国化」の過程が進んだのが古代と近代の特性と捉えたい。

対して、中世と現代には、二重権力や多重権力に分散し、権力と社会体制の混乱が深刻化する。日本では、源平の合戦や南北朝の乱や応仁の乱が続き、朝廷・天皇と幕府・征夷大将軍という二重権力体制が進行する。一方、西欧においては、十字軍の戦乱により教会と封建諸侯に権力分散していくが、この時代は、宗教と霊性・スピリチュアリティが自覚的に捉えられた時代で、日本では一向一揆などが起こり、現代のパワースポットブームにも該当するような蟻の熊野詣や西国三十三ヶ所などの聖地霊場巡りが流行した。

同時に、この時代に、「無縁・無常」が時代的キーワードともなっていく。政治経済や文化面だけでなく、自然そのものが繰り返し猛威を振るい、対策を講じがたい疾病が流行する。そんな「乱世」に突入しているのが「中世～現代」という時代である。

この「現代大中世論＝スパイラル史観」とは別の文脈で、ヘドリー・ブルの『国際社会論—アナーキカル・ソサイエティ』（岩波書店、2000年、原題：The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics, Macmillan, 1977）や田中明彦『新しい「中世」—二一世紀の世界システム』（日本経済新聞社、1996年）では、「新中世」「新しい中世」という現代世界論が展開されている。

ヘドリー・ブルは「新中世主義」として、①国家の地域統合、②国家の分裂、③私的な国際的暴力の復活、④国境横断的な機構、⑤世界的な技術の統一化という五つの特徴を指摘し、「決定的に重要な問題は、こうした『その他の団体』（other associations）によってなされる領土と市民に対する国家の主権ないし最高性への侵害が、国家の最高性を非現実的なものとし、主権概念からその効用と存在可能性を奪うほどのものであるかどうかである」（前掲訳書317頁）と述べているが、IS（イスラム国）の台頭などを考えれば、きわめて適確な指摘であった。それに対して、田中明彦は、「中世」における主体の多様性とイデオロギーの普遍性が「新しい中世」においては、①非国家主体の重要度の増大、②イデオロギー対立の終焉、③経済相互依存という点で大きく異なると指摘している。そこでは、ポストモダンの世界においては、経済活動を中心に世界はきわめて複雑に相互依存化しつつも、その隙間を縫って主権国家以外の間国家的・超国家的諸組織の活動が増大し、統治権力や権威が分散的かつ相互依存的に分散する「新しい中世」が生まれ混沌（アナーキー）化してきているということである。

私は、元号が「平成」（1989年1月8日）となった頃から、「現代大中世」論（現代は中世の課題をいっそう拡大再生産したような困難の中にあるという時代認識）をさらに強く主張するようになった。天台座主を4度も務めた慈円が言うように、世の中が「乱世」となり「武者の世」となっていくと直覚し、そのことを『朝日ジャーナル』への寄稿エッセイ（1989年）や『異界のフォノロジー』（河出書房新社、1990年）や音楽家の喜納昌吉との共著『霊性のネットワーク』（青弓社、1999年）などで強調してきた。その中で、日本中世には律令体制が大きく崩れ、征夷大将軍という令外の官が権力の中心となって二重権力構造が生まれたが、現代日本は米国という「征夷大将軍」に制圧され守護された二重権力構造（日米安保同盟と日米地位協定など）の中にあると主張した。

「メメント・モリ（memento mori、死を想え）」という言葉のように、「死」が顕在化し、前景化してきた「乱世」である中世に、死生を見つめ、鎮魂供養する文化が生まれてくる。「死」が「史」＝歴史認識を深め、「詩」＝鎮魂叙事詩を生み出す。それが慈円の『愚管抄』や琵琶法師による『平家物語』をも生み出した。

「現代大中世論」とは、図式化して言えば、四つのチ縁の崩壊現象とそれを踏まえた再建への課題を指している。それはまず地縁・血縁・知縁・霊縁という四つのチ縁の崩壊現象として現れてくる。限界集落を抱える地域共同体やコミュニティの崩壊、家族の絆の希薄化と崩壊、知識や情報の揺らぎと不確定さ、「葬式は要らない」とか「無縁社会」と呼ばれるような先祖祭祀や祖先崇拜などの観念や紐帯や儀礼が意味と力を持たなくなった状況、物質的基盤から霊的・スピリチュアルなつながりまで、すべてのレベルでチ縁が崩落し、新たな効果的な再建策やグランドデザインを生み出せないでいるのが今日的現状である。

中世に流布した「熊野観心十界曼荼羅図」が象徴的に示すように、中世は「心の時代」であった。同時に、「霊智・霊覚・霊性」など「霊」の付く語彙が頻出する「霊の時代」でもあった。そして中世的「心直し」は「信心」論や「安心」論として練り上げられていく。その「信心」が日本中世に急浮上してくるのは、もちろん、末世・末法の世だからだ。そんな世の中では、たとえば天台宗の千日回峰行とか真言宗の四度加行とかを悠長にやっていたことができない切迫感があった。時代は「末法の世」、戦乱の世で物騒なことこの上なかった。戦乱や疾病や自然災害などの多発で、目前に世も末のような「地獄」の光景があったのだ。

いかなる場所、いかなるところにも、「安全」も「安心」もない。だからこそ、「武士団」が登場して「武力」で

争いごとを解決せざるを得なくなる。「天下布文（化）」では治まらず、「天下布武」が志向されたが、それは強いものが勝つ優勝劣敗・弱肉強食の世の到来であった。そこではもはや前代の「道理」（慈円『愚管抄』）も「道義」も通用することはない。

そのような社会状況下において、「弥陀の本願」を「信心」する浄土教が広まっていった。天台・真言のような、また南都六宗のような「自力聖道門」を全うするのはこの乱世に甚だ困難と思われた。四条河原にも死体がゴロコロ転がっているような時代にあつて、今にも死にそうになっている人の心に届くのは、「南無阿弥陀仏」と唱えれば、阿弥陀如来の本願によって救われるという「信心」とその作法であった。法然は『選択本願念仏集』などを著し、その浄土門思想と称名念仏のワザ（作法）を着実に届けた。「自力聖道門」に代わる「他力易行門」の登場である。

この法然らの「他力易行門」は、この時代の「心」を突き刺すところとワザであつたためにまたたくまに支持者を増やした。その動きに、比叡山延暦寺は激しく法然を攻撃し、「他力易行門」の弾圧を画策し、ついに建永2年（1207）、法然は土佐に、親鸞は佐渡に流されることになる。「承元の法難」と呼ばれる事件である。

政治経済や文化面だけでなく、自然そのものが繰り返し猛威を振るい、対策を講じがたい疾病が流行する、そんな「乱世」に突入していった時に、その時代的危機を突破する新たな「こころの練り方」や「身心変容技法」が編み出されたのである。

この中世には、「死と史と詩」が密接に連関連鎖する。末法の乱世における戦乱などによる「死」を見つめる心から、「史（歴史観）」が構成されて、慈円の『愚管抄』、北畠親房の『神皇正統記』による歴史哲学や歴史認識が深められ、『平家物語』などの叙事詩的表現よると鎮魂の文芸（琵琶語り文芸）が生まれ、そこから申樂（能）の隆盛を見るに至る。また、新仏教（浄土宗・浄土真宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗・時宗）と新神道（伊勢神道・吉田神道）が独自の展開をとげた。末法（1052年～）の世の「死」を目前とした救いは、自力の行ではなく、絶対他力の「念仏・名号」「信心」に向かい、その「念仏・名号」と「信心」のありようを、法然（念仏為本）、親鸞（信心為本）、一遍（名号為本）らが、「称名念仏」や「踊り念仏」として説いた。

こうして、中世の乱れた心をつなぎとめる仏教のワザは、長期にわたる厳しい千日回峰行のようなものではなく、死を前にしても、一瞬にして一言で言い切ることのできる言葉、「念仏（南無阿弥陀仏）」（法然、親鸞、一遍）や「題目（南無妙法蓮華経）」（日蓮）となる。また、ただ座る・ひたすら座る（只管打坐）禅となった。そしてさらにそこに、一心不乱に「踊る」という「踊り念仏」（一遍）にまで深化徹底する。「こゝろよりこゝろをえんとこゝろえて 心にまよふこゝろなりけり」と一遍は詠うが、中世的「心直し」や「信心」の希求と行方をよく示す歌であろう。

こうして、戦乱による多数の「死」を鎮魂供養へと浄化する「史」観と祈りの籠った「詩」が必要とされた。ここに、末法・末世意識に基づく歴史の「発明」とも「再解釈」とも「再創造」ともいえる「史観」が醸成されてくると同時に、死者の怨霊や怨念を鎮撫する『平家物語』や『保元物語』『平治物語』『義経記』『太平記』などの詩的鎮魂の文学が生まれ、それが世阿弥の複式夢幻能として芸能化されていく。こうして、専修念仏、法華一乗など、一言化、断言化、専修化の「中世的段階」が進展していった。

乱れた世であればあるほど、そこで強く、「正」（道元『正法眼蔵』、日蓮『立正安国論』）を、「真」を、「根源（根元）」（吉田兼俱「唯一宗源神道」）が希求される。その根源神話としての中世神話を完成させたのが、吉田兼俱の「大元宮」の創建と『唯一神道名法要集』の著作であった。

この中世に、可視化と不可視化、リアリズム（写実主義）とミスティシズム（神秘主義）、武力（軍事力）と呪力（霊力）の両極化が進み、一方で、慶派（運慶、快慶など）の写実主義が花開き、さらにもう一方で、「秘すれば花」を説いた世阿弥（『風姿花伝』）や「隠幽教」を説いた吉田兼俱（『唯一神道名法要集』）の神秘主義が隆盛する。後者は、「秘する」「隠す」ことを美学・哲学・技法にまで高めた。

世阿弥にも吉田兼俱にも、神仏習合の色が濃くうかがえる。とりわけ、応仁・文明の乱後に創建された「大元宮」はその典型である。吉田兼俱は、「夫れ神とは、天地に先立ちて而も天地を定め、陰陽を超えて而も陰陽を成す。天地に在りては神と云ひ、万物に在りては霊と云ひ、人に在りては心と云ふ。心とは神なり。故に神は天地の根元、万物の霊性、人倫の運命なり。当に知る、心は即ち神明の舎、形は天地と同根たる事を」と『神道大意』で述べている。「天地」にあつては「神」、「万物」にあつては「霊」、そして、「人」にあつては「心」と言う吉田兼俱は説く。ここでは、天・地・人と神・霊・心はグラデーションをなし、「大元」において一つとなり、相互に貫通し合っている。

そして、そのような相互交通の不思議なる妙相を「霊」や「冥」という言葉で荘厳したのが中世的言説であった。

吉田兼俱は『唯一神道名法要集』の中で、「靈性、靈徳、靈通、靈応、靈号、靈経、靈宗、靈宝、靈璽」など、麗々しくも「靈」と付く後を頻出させているが、鈴木大拙の『日本的靈性』の主張とは別の文脈においてまさに世は「靈性の時代」であったといえる。

その中世的世界を代表する歌集は、八代集の最後を飾る『新古今和歌集』である。この『新古今和歌集』には、この集にしかない特別な部立てがあった。それが、「第十九巻 神祇歌」と「第二十巻 釈教歌」の部立てである。その『新古今和歌集』の最後に収められた歌は、新古今を代表する歌人西行法師の次の歌である。

闇晴れてこころのそらにすむ月は西の山辺や近くなるらむ（1979 番歌、悩み多き煩惱に覆われた心の闇がきれいに晴れ上がって、空にはこの上なく澄んだ月がかかっている。西方浄土の山辺に近づいているのだろうか）

このように、歴史を振り返ってみると、スピリチュリティやスピリチュアルケアやグリーフケアが前景化してきた現代社会の相と中世に生じた問題系とは呼応する点が多いといえるのではないかな。

スピリチュアルケアあるいはグリーフケアとしての能・申楽

世阿弥（1363-1443）は、『風姿花伝』の中で、能すなわち「申楽」が「天下安全・諸人快樂」の「遊宴・遊び」であると強調し、「魔縁を退けて、福祐招く」、「国穩かに、民静かに、寿命長遠」の「天下の御祈祷」であることを力説している。そしてこの六十六番の演目が長大なので、その中から特に「稲経翁、代経翁、父助」の三つを選び定めて、これを「式三番」と名づけ、この「式三番」の三種が法身・報身・応身の「如来の三身」であるとしている。このように、「翁」は、世阿弥においても特別に神聖視されていることがわかる。

また、世阿弥作とされる「高砂」の最後は、「悪魔を払ひ、収むる手には、寿福を抱き、千秋楽は民を撫で、万歳楽には命を延ぶ。相生の松風颯颯の声ぞ楽しむ颯颯の声ぞ楽しむ」と結ばれるが、ここにも「寿福」や「延命」が寿がれている。

能は生死観の表現であり、負の感情の浄化のワザであった。世阿弥は「申楽」が「寿命長遠」「寿福」「福祐」を招く「身心変容技法」であることを強調するが、その根底には、言霊の幸はう「和歌の道」がしっかりと息づいていることを明確に述べている。

その能＝申楽は、中世に花開いたすぐれたスピリチュアルケア・グリーフケアの探究であり表現でありワザであるとわたしは考える。自然と心の総合制御や調律に関わる「ナチュラルケア」と「スピリチュアルケア」のケアサイクルの確立を教学理論的に補強し命題化したのが天台本覚思想で、それを象徴的な演劇芸術的な身体表現としたのが能・申楽であったと捉えたい。

天台本覚思想の核心をなす命題は「草木国土悉皆成仏」である。その命題は、能の『鶴』『芭蕉』『杜若』『六浦』『西行桜』『高砂』『定家』『半蔀』『墨染桜』などの曲の中で通奏低音のように謡われている。例えば『半蔀』では、冒頭ワキが「これは都紫野雲林院に住居する僧にて候。さてもわれ一夏の間花を立て候。はや安居も過方になり候へば色よき花を集め、花の供養を執り行はばやと存じ候。敬つて白す立花供養の事、右非情草木たりといへども、此花広林に開けたり。豈心なしといはんや。なかんづく泥を出でし蓮、一乗妙典の題目たり。この結縁に引かれ、草木国土悉皆成仏道」（日本古典文学全集）と謡う。すると続いて、前シテの女が出てきて、「手に取ればたぶさに穢る立てながら三世の仏に花奉る」と和歌（短歌）を謡う。不思議に思った僧が女に問いかけると、女はその花は「夕顔」だと告げ、自分は五条あたりから来たとも言うのです。そこで僧が五条辺を訪ねると、「半蔀」から「靈」の「夕顔」が出てきて、光源氏との恋の顛末を懐かしげに語り、舞（序の舞）を舞って夜明けとともに消えてゆく。ここでは僧侶の「立花供養」のワザと「草木国土悉皆成仏」の思想が、「夕顔」の花を持つ「夕顔」自身を呼び出し、歌舞をなさしめ、鎮魂供養して収束することになる。また『墨染桜』でも、「あら有難の御経やな。草木国土悉皆成仏、^い実に頼もしや此文は、中陰経の妙文」と謡われ、「草木国土悉皆成仏」が『法華経』の生命思想の延長線上に、『中陰経』などに「有難」くも「頼もし」い「妙文」として出てくると謡われる。

そもそも世阿弥が確立した複式夢幻能の様式では、「諸国一見の僧」と名乗る仏教者や修験者（山伏）がワキとして出てきて、シテの「靈」と対話する。「靈」は多く、前半部では生者として登場し、後半部では死者ないし霊ないし神として登場する。成仏や安心立命をもたらす仏教や修験道と、歌舞音曲によって霊を鎮める神樂的鎮魂儀礼というシャーマニズム的神道の両面を能は取り込んでいる。「怨霊鎮め」という神道的観念と「煩惱消滅」という解脱志向の仏教的観念が複式夢幻能において融合しているのである。その意味では、能・申楽は、神道と仏教・修験道との合体であり、神仏習合の修験的演劇的ワザであった。

実際、世阿弥は『風姿花伝』の中で、申樂の始まりを、アメノウズメのミコトの神憑りに端を発する神樂から始まるとする「神道的起源と、釈迦説法の場合の外道を楽しませるワザから始まる仏教的起源と、世阿弥が属する秦氏の先祖の秦河勝が聖徳太子の時代に始めたとする家伝的起源の三種起源を主張している。

こうして、日本文化の中でもとりわけ日本的な芸能といえる能（申樂）は、イザナミの負の感情を引き継ぎ、「死」を媒介とした天の岩戸の前の「祭り」や「神懸り」から始まるとされてきたのである。『風姿花伝』第四神儀では、能（申樂）の起源は、「申樂、神代の始まりといふは、天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、天下常闇になりしに、八百万の神達、天の香具山に集り、大神の御心をとらんとて、神樂を奏し、細男を始め給ふ。中にも、天の鈿女の尊、進み出で給ひて、榊の枝に幣を付けて、声を挙げ、火処焼き、踏み轟かし、神懸りすと、歌ひ、舞ひ、かなで給ふ。その御声ひそかに聞えければ、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土また明白たり。神たちの御面、白かりけり。その時の御遊び、申樂の始め」と記されている。ここで言う、天の岩戸の前での「神懸り」や「御遊び」とは、隠れた（ということは、死んだ）天照大神の「霊」を復活させることであった。そのためのワザとして、祭り、神懸り、神樂が行われたのである。

神樂を引き継いだ能・申樂は、歌（謡）と舞と囃子を統合した芸であった。そしてその歌と舞の関係は、『花鏡』に「先聞後見」とか「無声為根」という言葉で示されているように、視覚よりも聴覚を先とし、声すなわち謡を根とし本とするワザである。その能・申樂は「天下の御祈祷」であり「寿福増長」のワザであることを繰り返し強調しているが、それは中世の戦乱の世の中で形を成した「スピリチュアルケア」や「グリーンケア」のワザであった。

最後に、世阿弥の子元雅（1394? -1432）が作ったとされる「朝長」を見ておきたい。源義朝（1123-1160）の二男の源朝長（1143-1160）の元家臣であった京都の嵯峨の清涼寺の僧（ワキ）が、平治の乱（1159年）で自害し果てた源朝長を弔おうと、美濃国大垣の青墓の宿にやって来、里人（アイ）から墓所を教えられ、そこに行くと、青墓の宿の長（前ジテ）が、朝長の自害の顛末を語り、朝長の菩提を弔ってくれるよう頼む。そこで僧が、観音懺法を以て菩提を弔っていると、朝長の亡霊（後ジテ）が甲冑姿で現われて、「魂は善所（極楽浄土）に赴けども、魄は修羅道に残ってしばし苦しみを受くるなり」と、魂の方は成仏しているけれども、魄の方は修羅道に堕ちてしばらく苦しんでいると語って、僧の廻向に感謝する。

この曲の中で、「昔は源平左右にして、朝家を守護したてまつり、御代を治め国家を鎮めて、万機の政事すなほなりしに、保元平治の世の乱れ、いかなる時が来たりけん」と謡われ、保元の乱・平治の乱から世が乱れ一気に戦乱の世に突入していくという時代認識が示されるが、その「朝長」の中に、源義朝の乳兄弟で一の家臣であった鎌田正清の名が「鎌田殿」とか「正清」とかと4回出てくる。その鎌田正清が我が家の先祖にあたり、その死が毎正月語られ、そのために正月にお屠蘇を飲むこともできず、一年の最大のハレの日を鬱屈して育ったために、いつしか私は中世という時代に関心を持たざるを得ず、またその時の戦乱をどのように鎮めていく道があるのかを探究し続けて今日に到った。（中略）

歌と風土。日本の自然と心。それとの交歓と表現と交響の中で痛み（ペイン）は分入し分有される。日本で「スピリチュアルケア」を実践する時に、弃えておくべき自然風土と心の表現について、鶴見和子はそのような風土や心を「アニミズム」と表現したが、それは『日本書紀』の中に「草木言語^{ことごと}ふ」世界として表現されている。そのような「草木」も語り、歌を詠む世界が、『古今和歌集』仮名序の「生きとし生けるものが歌を詠む」世界となり、「草木国土悉皆成仏」の天台本覚思想に集約されて、中世の西行や心敬などの「和歌即陀羅尼説」となり、能の謡の世界に至り、日本舞踊と和歌を愛し修めた鶴見和子にまでつながっている。

鶴見和子の魂の盟友と言える詩人であり作家が、熊本県天草生まれの石牟礼道子（1927年～）である。石牟礼道子が生来保持してきた存在感覚は、森羅万象に神仏が宿り、霊性が備わり、そのまま成仏し神聖であるというアニミスティックな天台本覚思想と共通のものであった。加えてそこに、末法思想の登場した中世に顕在化した凡夫や業苦の自覚や代受苦の思想が織り込まれる。『苦海浄土 わが水俣病』に描かれた胎児性水俣病を患う江津野杵太郎少年（9歳）の祖父の独白は天台本覚思想の切実なる現代版である。そこでは「神棚」に上げられたものはみな「神さん」となり、胎児性水俣病として生まれついた杵太郎少年こそが魂の深い「いちばんの仏さま」として江津野老人によって語られる。その老人のまなざしはすべての衆生に仏性を見出して礼拝した常不軽菩薩の精神と通底する。もともと深刻な胎児性水俣病という病苦に置かれた者こそが「いちばんの仏さま」に反転するという慈悲と諦念に満ちたパラドキシカルな反対物の一致のまなざし。煩悩即菩提あるいは凡夫即諸仏という中世的な逆理の射像。本覚思想と代受

苦思想との咬合。メチル水銀に侵された水俣の「苦海」こそが、汚濁に満ちた現世の中に「浄土」や神仏を顕現させる場所と機縁となるという逆説。それこそ、石牟礼道子が紡ぎ出す『苦海浄土』の痛みと福音である。そしてそれを新才能『不知火』に表現し昇華した。(中略)

2011年3月11日に東日本大震災が起こって以来11回、半年に1回定期的に東北被災地を福島県南相馬市(時には浪江町)から青森県八戸市まで約1000キロの海岸線を走り、主に社寺教会などの宗教施設や仮設住宅を訪問し、そのつど起っている問題点や状況などについて伺ってきた。その中で、宗教と神楽や能などの伝統芸能の持つ力を繰り返し考えさせられ、京都在住の観世流能楽師の河村博重とともに「鎮魂能舞」を作って、宮城県石巻市雄勝町の葉山神社(2015年9月20日奉納上演)や同市北上町の釣石神社(2016年6月19日奉納上演)などの社殿再建奉祝祭の祭りの中で奉納してきた。

釣石神社で奉納した「鎮魂能舞 北上」の冒頭の第一楽章は、「神ながらたまちはへませ 神ながら／神ながらたまちはへませ 神ながら／(歌) 北上遙けく 滔滔と流る／海幸山幸 はじけるいのち／友と語り 明日を夢見／今日の喜びを 常永久に／(語り) 平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖から真っ黒な壁のような高浪が一举に北上川に押し寄せ、みるみるうちに、家々を、田畑を、山野を呑み込んでいった。避難指示を待つて校庭に待機していた対岸の大川小学校の大勢の児童たちも呑み込まれていった。／赤い靴履いてた 女の子 異人さんに連れられて いっちゃった／横浜の港から 御舟に乗って 異人さんに連れられて いっちゃった／嗚呼 無情なり 嗚呼 無常なり／(語り) この貞観大地震発生時の天皇は清和天皇、政務は、摂政太政大臣藤原良房が司っていた。本釣石神社の御祭神天児屋根命は、長く日本の政務を担当してきた撰閲家の藤原氏・中臣氏の祖先神である。そして、天児屋根命の本地は地蔵菩薩と信仰された。／神ながらたまちはへませ 助けたまえ 南無阿弥陀仏 救いたまえ／(語り) 平成28年6月19日、東日本大震災から5年と3ヶ月、氏子崇敬者、また岐阜県南宮大社などの支援を受けて、石巻市北上町追浜に鎮座する釣石神社の新社殿が竣工なり、かくも盛大に奉祝行事が営まれることになった。／その復興・再建を祈り祝う、奉祝のみ祭に際し、ここに、京都市在住の観世流能楽師・河村博重と不肖・鎌田東二が共に心を込め、魂を込めて、「鎮魂能舞 北上」を奉納申しあげるものである。／神ながらたまちはへませ 神ながら／神ながらたまちはへませ 神ながら／北上遙けく 滔滔と流る／この麗しき 山河海／心尽して みたまを悼み／亡くしたいのちを 忘るまじ」と歌い語り、舞う。

トマス・インモース(1918-2001、カトリック神父、比較演劇学者、上智大学神学部教授を務めた)は、『深い泉の国「日本」一異文化との出会い』(春秋社、1985年、中公文庫【解説：鎌田東二】1999年)の中で、「カオスとよんでも、魔とよんでもよいが、こうした闇の力を封ずるには、強烈な意志が必要で。その意志のひとつの表われが能だと思うのです。(中略)過去のあらゆる芸能形式をとりこむと同時に、歴史以前の演劇の元型である祭祀に根を下ろしています。能舞台も、他の舞台の構造とは違ってはいますね(113-117頁)、『井筒』を見て、私は慄えました。存在の底から揺り動かされるような感じでした。世阿弥という人物。彼はどのようにこのような作品を書くことができたのだろうか、と思いつづけました。(中略)私によれば、世阿弥とは、ソフォクレスとアリストテレスの混合した人間(125-126頁)と述べている。対話者の加藤恭子が「それはまた、凄いですね(笑)。詩人であり戯曲家であり、哲学者ですか?」と訊ねると、「ええ、そのすべてですよ(笑)」と答えている。

・「私は看護師をしています。夫は医師です。祖父は観世流の能を何十年もやってきてお弟子さんもたくさんいます。その父の看取りをした時のことです。多くの看取りの場面では、苦しく、暗く、辛い感じがするのですが、父の最期の頃には能のお弟子さんたちが来て、一緒に楽しそうに謡いを謡っていたりしました。合唱するように。父もニコニコして、一緒に謡っていました。そして、その気分の昂揚の中で、大往生していきました。その父を見ていると、能や謡には不思議な力があると思わざるを得ませんでした。」(2016年7月30日看護師)

・「在宅ケアの臨床の場面で、死にかけている患者がうーうーと唸っているような、歌っているような3日間を過ごし、その唸りでもうダメかと思っていたら、持ち直したりしました。が、耳を近づけて、その唸りを聴いていた時、ふとこれは、『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり』という『平家物語』の一節であることに気づきました。その方は、3日3晩、『平家物語』の冒頭の一節を朗々と謡い続けていたのです。それに気づいて、「これは『平家物語』の冒頭の一節ではありませんか?」とご家族に伝え、みんながそれを「そうですね」と認識した途端に、亡くなりました。以

来、私にとって『平家物語』が重要になりました。」(稲葉俊郎東京大学医学研究科助教・循環器内科医)

・免疫学者の多田富雄(1934-2010、東京大学名誉教授)は『脳の中の能舞台』(新潮社、2001年)や『能の見える風景』(藤原書店、2007年)などで、2001年で脳梗塞で倒れて以来、「善知鳥」などの能の曲が身に染みて深く理解できるようになったという。それによって、能の持つ力とはたらきがよく見えてきたと述べている。(鎌田東二「死生学とスピリチュアルケア—宗教者・ケア従事者・研究者の役割」(グリーンケア研究第5号,上智大学グリーンケア研究所,2017年3月発行より抄出)

4、「神出鬼没 幽冥巡礼」京都能楽会「京都薪能」企画政策委員会 2017年6月1日・2日 於:平安神宮 パンフレット

「神出鬼没」。神が出て、鬼が没する。まさにこれこそ能(申楽)の真髓である。

世阿弥は『風姿花伝』で、申楽とは「魔縁」を退け「福祐」を招く「天下の御祈祷」であり、「諸人快樂・寿福増長」のワザであると繰り返し述べている。「鬼=魔縁」を退け、「神=福祐」を招来する。拙著『世阿弥—身心変容技法の思想』(青土社、2016年)ではこの世阿弥の主張を考察した。

「神出鬼没」とは、変幻自在に現れたり消えたりすることを意味し、予測のつかない出没自在を表わす。英語の“phantom”やフランス語の“fantôme”も「幻」の意味の他、「神出鬼没」や「幽霊・亡霊」を意味する。とすれば、「神出鬼没」とはまさに能の真髓といえる。

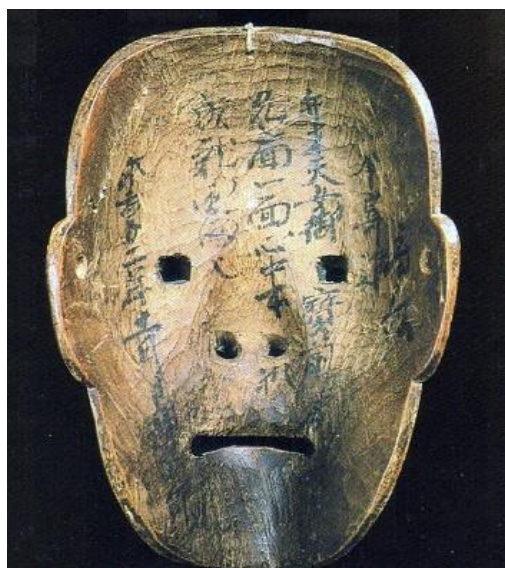
観世宗家には、翁面より古い鬼の面が伝わり、最重要視されてきた。平安時代末期の春日という面打ちが作った「赤鬼」と「黒鬼」と呼ばれる面がそれである。古くは、追儼式で使用された鬼の追儼面は終わったら壊されたという。

「赤鬼・黒鬼」という二体の鬼面が大切に伝承されてきたのは、観世家が追儼式を司っていた家だということの意味している。とすれば、「神出鬼没」を命題としてきたのが観世宗家ということになる。

能には多く「諸国一見の僧」や「山伏」が出てきてワキを務める。諸国を遍歴して「御祈祷」を施す僧や山伏は、「神」や「鬼」や「死者(死霊)」の目撃者であり、判定者(審神者)であり、対面・対話者であり、鎮魂供養者であった。その僧山伏に扮したワキがシテの「神出鬼没」を見守り誘導し道案内する仲介者となって能は進行する。

奥吉野の天河大辨財天社には神秘不可思議な「鬼」の伝承と文化がある。永享2年(1430)、元雅は天河社に詣で、「心中所願成就」と筆書きした「阿古父尉」の能面を奉納し、「唐船」を舞った。面裏には、「唐船 奉寄進 弁才天女御宝前仁為允之面一面心中所願成就円満也 永享二年十一月日 観世十郎敬白」と筆書きされている。天河社では役行者に付き従った「前鬼」の子孫が宮司を務め、毎年2月2日には先祖である鬼を迎える「鬼の宿」と呼ばれる特殊神事を執り行ない、翌三日の節分祭では「福は内、鬼は内」と「鬼」を迎え入れる豆撒きを行なう。

京都の吉田神社のある吉田山は古くは「神楽岡」と呼ばれる聖域であったが、平安時代初期に春日社が勧請され吉田神社となった。「神出鬼没」に関わる京都の神社の一つが吉田神社である。鞍馬寺にも鬼の伝承がある。宝亀3年(772)、鑑真の高弟鑑禎がある夜、山城国の北方に霊山があるという霊夢を見る。その霊山を探しに出た鑑禎はある山の上方に宝の鞍を乗せた白馬の姿を見た。その山に入った鑑禎は「女鬼」に襲われ殺されそうになるが、危機一髪で枯れ木が倒れて鬼は押しつぶされた。翌朝、そこに毘沙門天の像があったので鑑禎はこれを祀る一寺を建立し、鞍馬寺が建立された。その後、寛平年間(889-897)に、東寺十禅師の一人の峯延が毘沙門天の力を借りて「鬼女」を退治し、それが現在の「竹伐会」の始まりだという(『鞍馬蓋寺縁起』)。



京都には両賀茂神社や松尾大社や伏見稻荷大社や石清水八幡宮などの古社・大社を始め、神秘霊験を伝える神社は上御霊神社や北野天満宮や栗田宮や幸神社や清明神社や白峯宮など枚挙に暇がない。京都全体が一つの幽冥世界であるかと思えるほど、平安京・京都は奥深い、神と鬼のちはやぶる日本最大の都であり続けている。

参考 URL : 身心変容技法研究会 : <http://waza-sophia.la.coocan.jp/> 『身心変容技法研究』第1号~第6号

鎌田東二オフィシャルサイト : <http://moon21.music.coocan.jp/>

鎌田東二『世阿弥—身心変容技法の思想』青土社、2016年4月刊

鎌田東二『言霊の思想』青土社、2017年7月刊予定